



諏訪立川流の近世後期における建築活動について
—— 甲府市穴切大神社随神門と
—— 鯉沢町八幡神社本殿を中心として ——

k97065 佐藤昌彦

1. はじめに

1.1 研究の背景と目的

日本の建築史において近世は各地の大工集団が活躍を見せ、出身地名によって塩飽大工、気仙大工のように呼ばれ、数多くの作品を残した時代である。

本稿では江戸中期から後期にかけて諏訪地方を中心に堂宮建築の建設に活躍した立川流という建築流派を取り上げ、彫刻装飾をふんだんに用いた諏訪立川流による建築作品の事例を紹介しながら、その作品活動について分析したいと考える。

諏訪立川流の先行研究の内容をふまえ、本稿では甲府市穴切大神社随神門と鯉沢町八幡神社本殿の建築を実測調査し、立川流（富棟・富昌）の作品活動とその関係を明らかにし、活動範囲に関する考察を加えたい。

1.2 研究の方法

実測調査は平成12年8月21日、鯉沢町の八幡神社を、10月19日、穴切大神社随神門について実施し、さらに各々の構造および意匠のシート作成、現場撮影を行った。かつ、諏訪立川流の史料として、諏訪市博物館所蔵の宮坂家文書の撮影・記録を行い分析対象とした。

2. 諏訪立川流の興隆と特徴

『立川流の建築』による、諏訪立川流の興隆は次の通りである。立川流の系図を表1に示す。



表1 立川家系図

信濃国の桶職人の次男として生まれた和四郎（1744～1807）は宝暦6年（1756）、江戸に出奔した際に、建築彫刻家立川小兵衛富房の弟子になり、そこで大工修業を行なった。これが信濃国内の建築はもちろん江戸幕府直営の建築（静岡・浅間神社、京都御所御門）にまで関与した諏訪立川和四郎の始まりとなった。江戸立川流の棟梁となる話はあったのだがその話を断り、宝暦13年（1763）に帰郷して諏訪上社の工匠（原五左衛門）の協力を得て、諏訪大社下社秋宮の建築に携わった。その彫刻の美しさ、精巧さが認められ、それから信州地方で名を馳せるようになった。そして、二代和四郎が活動圏を広げ、東は千葉県の千葉神社から西は京都府の京都御所御門の彫刻まで、きわめて広い範囲に作品を残したのである。

3. 穴切大神社と随神門について

穴切大神社は甲府市街地の南西部に位置している。鳥居の先に、二層の楼門である随神門がある。これをくぐった先に境内が開け、正面に拝殿があり、その奥に桃山建築の本殿が建つ。拝殿の向かって左側には社務所があり、右側には大正10年（1921）に建てられた神楽殿が建つ。

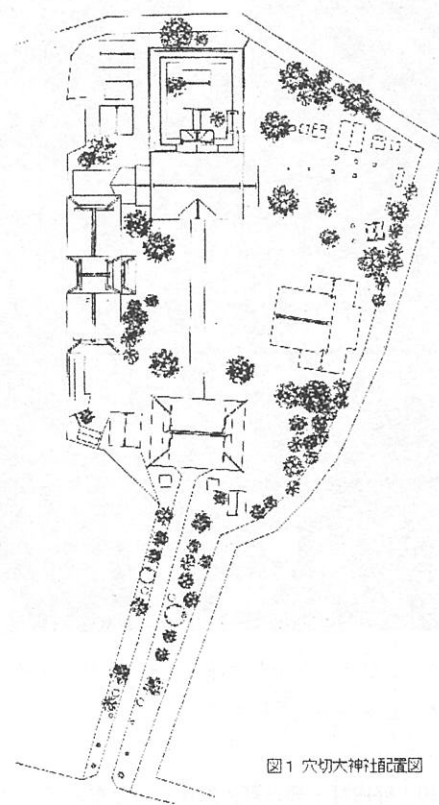


図1 穴切大神社配置図

随神門は三間一戸、二層の楼門である。初層の正面（鳥居）側では控柱筋の平柱二本を省略し、隅柱二本を太い大虹梁によって繋ぐ。これに二具の二手先斗拱を載せて、二層の床組となる桁・梁を支承する。初層の主柱筋より奥（本殿）側の控柱にかけて、左右一間ずつを随神の間とし、中央一間を通路とする。随神二像はそれぞれ正面（鳥居）側を向いて安置される。

初層では正面の大虹梁を受ける隅柱から前方へ獅子鼻を、側方へ牡丹の龍彫を突出させ、大虹梁には彫りの深い渦・若葉彫刻、眉をつけ、下端に錫杖彫りをつける。主柱筋では中央通路の両脇の柱にやはり獅子鼻をもうけ、左右の随神の間の頭貫上には、それぞれ中備として松に鳥の彫刻を載せる。さらに頭貫の先端は雲形状の木鼻とし、側方へと突出させる。中央通路側では渦・若葉彫刻および錫杖彫りのついた虹梁を架け、中備として波に魚（鯉と思われる）彫刻を飾る。初層背面側では随神の間の頭貫上中備として、各々、雲に麒麟の彫刻を飾る。随神の間は正面および中央通路側に格子をはめて随神像を見せ、背面および側面は板壁とする。

二層は桁行三間、梁間二間として、周囲に切目縁をめぐらし、高欄は擬宝珠高欄である。内部には初層からの通し柱である二本の柱が主柱筋中央に立ち上がる。内部の床は板張りである。正面桁行の三間のうち、左右各一間を引戸とし、中央間に板扉を設ける。他は壁を横板貼りとする。組物は二手先斗拱で、平では雲文様の木鼻、波の形状に彫り出した尾垂木一段を設ける。隅では正面側、および背面側に獅子鼻を前方へと出し、側方へは正面で猿鼻、背面で象鼻を設け、出隅

への尾垂木は波彫刻と龍彫刻の二段、隅木下にも雲彫刻をつける。なお二層では支輪に波と貝の彫刻を周囲に巡らせる。

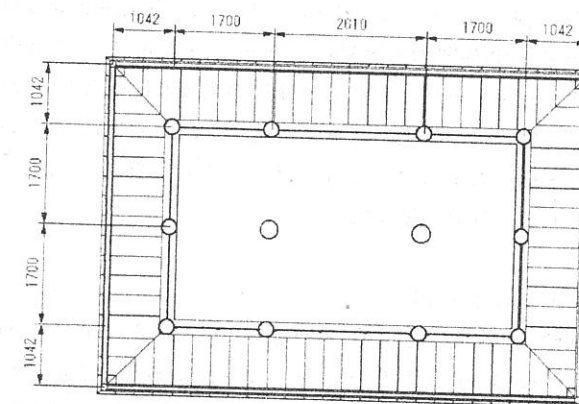


【写真1】随神門正面

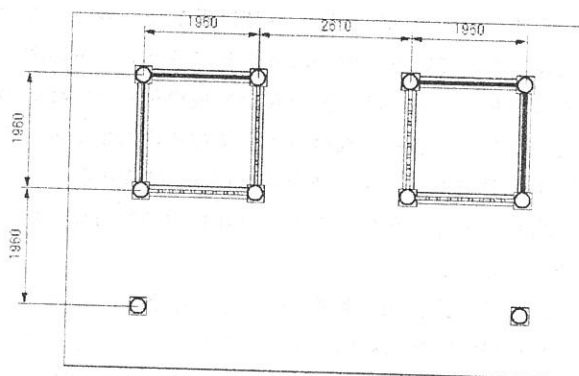


【写真2】2層の木鼻

随神門の平面図を以下に示す。



2層平面図



1層平面図

図2 穴切大神社随神門

この随神門の特徴として、次の点が列挙される。

①初層の正面側で控柱筋の平柱二本を省略し、隅柱二本を成の高い大虹梁によって繋ぐ。大胆な構造によって大虹梁および主柱筋の彫刻をきわだたせ、かつ門として中央の通路を通りやすく演出している。

②全体として木鼻や臺股の彫刻、支輪彫刻・尾垂木彫刻などが見事な建築である。そのうち特徴的なのが虹梁下端に彫られた錫杖彫り、および二層の支輪に設けられた波に貝の彫刻であり、諏訪立川流の建築であることを窺わせる。

③前述の①および②からは明らかに江戸後期以降の建築と考えられる。主柱筋二本が通し柱として二層目に立ち上がっているが、これは正面側の初層平柱2本を省略し、大虹梁によって正面3間分の空間を開け放っていることから、初層に降りる二層の荷重負担をできるだけ減らすために、高い通し柱によってバランスをとったものと考えられる。

④普通、随神門は主柱筋の前後に随神の間があり、これが中央通路の左右に置かれるので、随神の間は4室となる。穴切神社随神門の初層平面は主柱筋の正面側に随神の間がなく、この部分は吹き放ちになっていて、随神の間は主柱筋より背面側に左右2室おかれる。この2室は通常、背面側、すなわち境内側を向いて開いているのだが、ここでは正面に開いており、平面上の特徴となっている。

穴切神社の社記である『郷社穴切神社縣社昇格願書 附境内社記』に示されるように、当建物は寛政6年上棟、同7年

遷宮の建造物であり、大工は諏訪立川流の立川和四郎富棟(初代)である。随神門の右随神の台座裏に「寛政 7 年乙卯歳」(1795)の銘があり、これが旧棟札の寛政七年遷宮と一致することから、この時期の建造物と考えられる。当随神門の建立年代とその大工についてはこれまで不明であったが、本研究により明らかになった。

4. 鯉沢町八幡神社について

鯉沢町八幡神社は、山梨県の南西、南巨摩郡に位置する鯉沢町の町役場から国道 52 号を挟んで対面にある路地を上ったところにある。境内には神楽殿、拝殿、社務所などが建つ。

身舎柱は円柱、向拝柱は几帳面付の角柱である。身舎は内陣と外陣に分かれ内陣は板敷、外陣は畳敷で、外陣の天井は棹縁天井となっている。組物は外廻りが二手先、下陣内廻りは出組みである。屋根は二軒で身舎の飛檐垂木が向拝部の打越し垂木となり、さらに飛檐垂木が伸びる構造である。また屋根は本瓦葺であるが両脇及び西面(背面)は銅板葺きとしている。高めの浜縁があり五手先の腰組に乗る縁は切目縁で、擬宝珠付きである。

木鼻は獅子、猿、象の動物から雲、渦、波も用いてある。向拝正面(鳥居側)を向く獅子は阿吽をなしており水引虹梁を挟んで向拝の垂木にかかる手挟は獅子と対になって好んで使われる牡丹の籠彫りをつける。水引虹梁の彫刻は梅、下端には錫丈彫りが見られ、中備は両脇に龍を備える。向拝の組物は連三斗である。

身舎の正面三間、及び側面の二間の合計七間における中備は本墓股の形式をとり七福神がそれぞれに用いられる。また、身舎内側における中備は撥束となっている。脇障子には蝦蟇を用いて妖術を使うという蝦蟇仙人の像と、龍に水をやる老人の像を備える。これは龍の傷を治療するという馬師香仙人ではないかと思われる。

鯉沢八幡神社の建築について「鯉沢町史」は次のように述べている。

「寛政 12 年(1800)本殿竣工、入札者 14 名、栄助落札。

文化元年(1804)本殿立替。棟札有り。

弘化 2 年(1845)神楽殿皮葺成就。当村大工志村栄助ほか」上記によると八幡神社の建設には鯉沢村大工栄助が関与し、本殿は文化元年(1804)の立替と理解できる。ところが当建築に特徴的な匠を、立川流二代富昌の甥であり、娘婿であった立川昌敬の残した宮坂家文書と比較すると、建築の下絵に類似したものが発見された。まず蝦蟇仙人である。

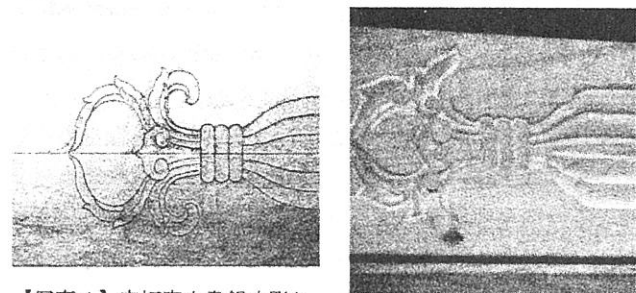
この下絵は、本来墓股の下絵として書かれた蝦蟇仙人だが顔の雰囲気はごく似通っている。

また最も特徴的であるとされる錫丈彫りの形について、ほぼ同形状の下絵が見つかった。



【写真 2】八幡神社脇障子蝦蟇仙人

【写真 3】宮坂家文書蝦蟇仙人



【写真 4】宮坂家文書錫丈彫り

【写真 5】水引虹梁下端錫丈彫り

彫刻の作風は人物彫刻を得意とした二代富昌戸の関連を考察させるがその接点があるとすれば彼が甲州での仕事を精力的に行っていた弘化年間の八幡神社屋根檜皮葺であったらう。以上のことから、鯉沢八幡神社を立川流建築であると実証することは現時点では不可能であるが、何らかの影響を受けたものであることは間違いないと考えられる。

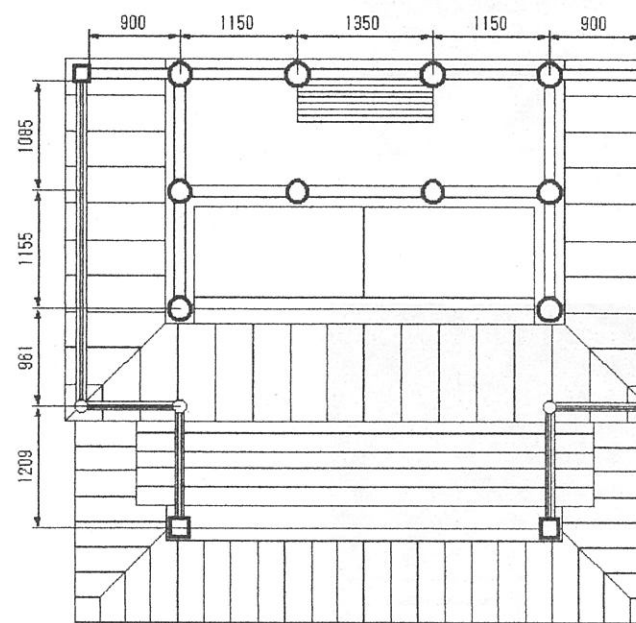


図3 鯉沢八幡神社平面図

5. 結論——立川富棟の活動系譜

以上みてきたように、穴切大神社随神門は史資料に明記されている通り明らかに立川流である。しかも建築年代から推測される工匠は初代富棟である。鯉沢八幡神社については今回残念ながら立川流を実証することが出来なかったが、その素晴らしい彫刻が他の工匠の手によるものならば近隣の地方で、立川流と争ってその名を聞いてもいいと思えるほど見事な彫刻建築である。

以下に富棟・富昌の活動系譜を示す。

建築名	建設年代	建築所在地
初代富棟		
白岩観音堂	安永 3 年(1774)建立	茅野市塚原
諏訪大社下社秋宮幣帛殿	安永 9 年(1780)上棟	諏訪市下諏訪
手長神社	天明 2 年(1782)請負、天明 8 年建立	諏訪市上諏訪
矢彦神社	天明 2 年(1782)建立	上伊那郡辰野町
白鹿神社	天明 3 年(1783)建立	下伊那郡高森町
清水寺本堂	天明 5 年(1785)建立	東筑摩郡坂北村
善光寺大数進	寛政元年(1789)建立	長野市元善町
穴切大神社随神門	寛政 7 年(1795)建立	山梨県甲府市
田沢稲荷社	寛政 7 年(1795)建立	茅野市田沢
遠州秋葉神社	寛政 8 年(1796)建立	静岡県周知郡森野
和田無極寺本堂	寛政 12 年(1800)請負、文化 2 年(1805)建立	松本市和田
長岡神社	享和元年(1801)建立	上伊那郡箕輪町
浅間神社・彫刻	享和 2 年(1802) ~	静岡県静岡市宮ヶ崎
2代富昌		
北小河内神社	文化 5 年(1808)上棟	上伊那郡箕輪町
光前寺三重塔	文化 5 年(1808)建立	駒ヶ根市赤穂
内々神社	文化 10 年(1813)建立	愛知県春日井郡坂下町
小出諏訪社	文化 12 年(1815)建立	上伊那郡西春近村
弥彦神社	文化 14 年(1817)建立	塩尻平出
壺井八幡神社	文政 8 年(1825)建立	茅野市山田
蘇原神社	文政 10 年(1827)建立	木曾郡木祖村
高島谷神社	文政 12 年(1829)建立	駒ヶ根市東伊那
諏訪大社下社秋宮神楽殿	天保 6 年(1835)上棟	諏訪郡下諏訪町
諏訪大社上社本宮	天保 6 年(1835)上棟	諏訪市神宮寺
玉川古御堂	天保 8 年(1837)建立	茅野市北久保
武水別神社	天保 9 年(1838)請負、嘉永 3 年(1850)建立	更埴市八幡
熊野神社	天保 11 年(1840)建立	上伊那郡辰野町
小口薬師堂	天保 12 年(1841)建築	岡谷市東銀座
矢彦神社神楽殿	天保 13 年(1842)建築	上伊那郡辰野町
浅間神社	天保 14 年(1843)完成	静岡県静岡市宮ヶ崎
下教米石諏訪社	天保 15 年(1844)建立	山梨県北巨摩郡白洲町
海岸寺観音堂	弘化 2 年(1845)建立	山梨県北巨摩郡須玉町
興正寺山門	弘化 2 年(1845)建立	更埴市森
豊川稲荷総門	弘化 4 年(1847)建立	愛知県豊川市
福島八剣神社	弘化 4 年(1847)請負、嘉永 5 年(1852)建立	諏訪市福島
小和田八剣神社	嘉永元年(1848)建築	諏訪市上諏訪
須々岐水神社	嘉永元年(1848)建築	更埴市屋代
水上金毘羅神社	嘉永 3 年(1850)建築	上伊那郡高遠町
三熊野神社	嘉永 3 年(1850)建築	静岡県小笠原郡大須賀町
常楽寺	嘉永 4 年(1851)建立	中野市栗和田
千葉神社	嘉永 5 年(1852)請負	千葉県千葉市
十念寺秋葉社	嘉永 6 年(1853)建立	長野市西後町
京都御所御門	安政 2 年(1852)~安政 4 年(1857)彫刻	京都府京都市
永福寺旭堂	安政 3 年(1853)建築	塩尻市沢

表 2 各建築の意匠シート

富棟の活動系譜を時代別に追ってみた。建築業を始めた当初は諏訪の付近での活動が主であったが、次第に長野全域に広がり、山梨・静岡にまで到達する。短期間でこのような広域に手を広げられたのは、富棟自体は諏訪で彫刻の仕事をし、作品を現場に送らせるという合理的な経営形態をとって

いたために実現したものと考えられる。



富棟 安永3年~天明2年



富棟 天明2年~寛政7年



富棟 寛政8年~享和2年

初代富棟の活動圏は先行研究では長野・静岡の 2 県に過ぎなかったが、本研究により甲府市穴切大神社随神門が初代富棟の作品と判明したため、彼の活動範囲は他県に拡大しこととなる。さらに当時の甲府城下は甲斐下山大工と甲府町方大工が職域争いをしていた時期にあたり諏訪立川流が仕事を残せたことは注目に値する。

鯉沢八幡神社も立川流の何らかの影響を受けたものであることは間違いない。水運で繁栄した鯉沢もまた下山大工と身延山大工、地元大工の活躍の舞台であったことが、それを超えて影響を及ぼしたことは諏訪立川流の実力であったのだろう。

参考文献

- ・甲府市史
- ・別編 II 美術工芸
- ・鯉沢町史
- ・甲斐国史第三巻
- 論文「諏訪立川流富昌及び昌敬の建築作品と造営方法について」
- 「江戸後期における諏訪立川流建築の調査研究」 佐伯瑞張

図 4~5 富棟の時代別活動範囲